

平成 23 年 10 月 7 日

フジイ興産株式会社
代表取締役 藤井章雄 殿

社団法人 日本建築学会
近畿支部支部長 横田隆司

旧西山記念会館の保存に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、御社におかれましては、去る 2011 年 3 月末に閉館されました神戸の旧西山記念会館を購入された由、仄聞しております。

ご承知のように、旧西山記念会館の建物は、別紙「見解」に記します通り、近代日本を代表する建築家・村野藤吾（1891～1984）の代表作の一つであり、とりわけ晩年の村野作品の特徴がよく表れた、極めて価値の高いものです。

また旧西山記念会館は、阪神大震災で震度 7 の激震地区に建っているながら、倒壊などの大きな被害を受けることもなく、その後復興の拠点として活用されたことも伺っております。デザインのみならず、耐久性においても十分な価値を持つものと考えられます。

近年では、こうした大規模な鉄筋コンクリート造建築は、長寿命化を図り活用してゆくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。

御社におかれましては、今後も旧西山記念会館を末永く有効活用されることを期待致しております。この文化的資産ともいえる建築の保存活用を図るための方途を積極的にご検討頂き、貴重な文化財保存を図られますようお願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存に関して、技術的支援などできます範囲でお手伝いさせていただきますと考えておりますことを申し添えます。

今後とも、この優れた由緒ある建造物と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

平成 23 年 10 月 7 日

旧西山記念会館についての見解

日本建築学会近畿支部
近代建築部会 主査 橋寺知子

・建物の概要

神戸市中央区脇浜町 3 丁目 4-16 に所在する本建物は、1975 年(昭和 50 年)に竣工した。鉄骨鉄筋コンクリート造の地上 5 階建て地下 2 階を有する建築で、建築面積 1,049 平米、延べ床面積は 6,350 平米を有する。設計は村野・森建築事務所(村野藤吾)および川崎製鉄営繕部建築課、施工は清水建設による。

建物は、神戸で創業した川崎製鉄(現・JFE スチール)初代社長、故西山彌太郎の偉業を顕彰する記念事業の一環として、当時の川崎製鉄の本社ビルの隣の敷地に建設された。

竣工後、1995 年の阪神大震災の際に被災した個所の補修などが行われたものの、建物の外観から室内、建具に至るまで、ほぼ竣工当時のまま残されている。また、村野が旧西山記念会館のために設計した家具類もほぼそのまま残されている。全体としては良好に維持されている。

1976 年には、建築主と設計者と施工者が一体となり良好な関係で造られた優れた建築物に贈られる BCS 賞(建築業協会賞)を受賞している。また 1993 年には、神戸市内に存在する優れた建築物として神戸建築百選に選ばれている。

なお村野の建築事務所で作成された本建物の設計図面資料が、計画時のスケッチなどとともに京都工芸繊維大学美術工芸資料館に収蔵されている。同資料館で 2007 年に開催された第 9 回村野藤吾建築設計図展で旧西山記念会館の図面類が一般公開され、同展の図録『村野藤吾建築設計図展カタログ 9』にも収録されている。

・村野藤吾の作品としての価値

村野藤吾は、1918 年に早稲田大学建築学科を卒業後、大阪の渡辺節が主宰する渡辺建築事務所に入所し、それ以来大阪を拠点とした。1929 年には大阪に村野建築事務所を開設し(1949 年に村野・森建築事務所に改称)、商業施設、オフィスビル、住宅、学校施設、美術館など、全国各地で数々の建築の設計を手掛けた。その作品は日本建築学会賞や日本芸術院賞を受賞している。また村野は、1955 年には日本芸術院会員となり、1967 年には文化勲章を受章するなど、日本を代表する建築家としてよく知られている。日本建築家協会会長、イギリス王立建築学会名誉会員、アメリカ建築家協会名誉会員としても活躍した。

村野が設計した建築物は、2005年に宇部市渡辺翁記念会館（1937年竣工）、2006年に広島世界平和記念聖堂（1953年竣工）、2009年に日本橋高島屋増築（1952年竣工）が、それぞれ国の重要文化財に指定された。また2009年には村野が改修に携わった迎賓館本館（旧赤坂離宮／1974年改修）は国宝に指定された。近年村野の建築作品は、文化財としての価値が極めて高く評価されている。

旧西山記念会館は、装飾を排し抽象的な形態を用いたモダンな方法でデザインされたものである。全体に正三角形と正円を組み合わせたシンボリックなものであり、同時に村野自身が粘土を用いてデザインを決定したという、自由な柔らかい曲線で全体が整えられている。こうしたシンボリックな形態や自由な曲線による豊かなデザインは、とりわけ晩年の村野に特徴的なものである。それは、直線だけで整えられた同時代の他の建築と異なっていたため、多くの村野ファンを生み出し、村野の名声を一層高めることになった。

村野は、鉄やコンクリートを用いた無装飾のモダニズム建築が世界的に台頭した1930年代にあって、モダニズムに基づきながらも、建築が民衆に親しみやすいものとなるよう、建物の立面のデザインや装飾の重要性を説いていた。旧西山記念会館のシンボリックな形態や自由な曲線は、こうした態度の表れの一つと考えられ、戦前から一貫した態度を見せた村野の意識がしっかりと息づいた村野らしい作品だと言える。

・デザイン上の価値

旧西山記念会館は、敷地の形状に合わせた正三角形と正円を組み合わせた幾何学形態で骨格が形作られながら、壁面は自由で独創的な曲線で覆われるという、他に例を見ない独創的なものである。明快な秩序性と自由さを併せ持つ点に特徴がある。

屋内でもこうしたデザイン上の特徴が踏襲されている。1階には、事務室や創業者西山彌太郎の業績を振り返る記念室、談話室、応接室などが、梅の花をイメージさせるような形の中に配置され、それらを取り囲むようにガラス張りの廊下が正円形を描いて巡らされている。記念室やラウンジ、廊下に配された椅子やテーブルも村野のデザインによるもので、村野特有の柔らかい曲線が、梅の花弁のように柔らかく湾曲する壁面と相まって、独自の統一された雰囲気を生み出している。

2階から3階にかけては、約一千人を収容できる大ホールがある。正円形の平面を生かして、ステージを囲むように客席が配置されている。天井には正六角形状の鉄骨の巨大な構造体が見えているが、これが構造力学的にホールの大空間を可能にしており、力強い印象を与えている。壁面は、緩やかな曲線の凹凸により、正円形の強い幾何学形態の輪郭を柔らかくしている。

また4階には、中央にガラス屋根で覆われた中庭があり、その中庭を囲んで喫茶室やクラブ室、会議室が配されている。喫茶室の椅子やテーブルも村野のデザインである。

そして地下1階には、宴会場として使用できる中ホールがある。これも正円形の平面を

持つが、部屋を囲む壁が少し窪んで梅の花弁のような膨らみを作り出し、天井には梅の花をモチーフとした照明器具が埋め込まれ、全体に柔らかい雰囲気を作っている。

このように旧西山記念会館は、幾何学形態の力強い秩序で整えられながら、同時に自由さや柔らかさ、細部の丁寧さが備わっている。いずれも村野独自の、かつ洗練されたデザインとなっており、優れた建築作品としての価値を有している。

・景観上の価値

建物は国道 2 号線と浜手幹線が斜めに交わる交差点に隣接する三角形状の敷地に立地しており、国道を東から車で走行するとその姿は目立つ。村野の作品としては珍しく、都市の中に在りながら遠望を可能にする作品である。村野が敷地の特性を考えて、遠望によっても際立つものとなるよう、幾何学形態を用いてシンボリックに仕上げたものと考えられる。また、大きな国道に面した敷地の特性を生かし、国道からの眺めを意識したことは、1960 年代から 70 年代にかけてのモータリゼーションの只中に建設されたという時代性も感じられる。

・神戸ゆかりの建物としての価値

この建物は、神戸で創業した川崎製鉄（現・JFE スチール）初代社長、故西山彌太郎の偉業を顕彰する記念事業の一環として、当時の川崎製鉄の本社ビルの隣の敷地に建設された。1966 年の西山彌太郎の没後に建設計画が生じたもので、当時の藤本一郎社長らの意向による文化勲章受章者の建築家に設計を依頼したいとの希望から、村野に決定したという。

村野は戦前から、川崎製鉄の前身にあたる神戸の川崎造船所（現・川崎重工業）関係の建物を神戸市内に複数設計していた。村野が設計者に選ばれたのは、そうした川崎グループとの良好な関係や業績が関係した可能性も十分考えられる。

また旧西山記念会館は、阪神大震災における震度 7 の激震地に建っているが、倒壊などの大きな被害を受けることもなく、震災直後には震災復旧要員のための施設として機能し、その後は復興イベントを開催し被災者を勇気づけるなど、復興のための重要な拠点の一つとなっていた。

つまり旧西山記念会館は、戦前の川崎造船所時代からの流れを汲んで、神戸の戦後の発展、そして阪神大震災後の復興をも象徴する、神戸ゆかりの優れた建物であると言える。